神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	山北中学校遺跡出土の武蔵型板碑について
著者	鳥居和郎
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学― 第 43 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2016 年（平成 28 年）12 月
判型	A4（210mm × 297mm）

【資料紹介】

山北中学校遺跡出土の武蔵型板碑について

鳥居和郎

【キーワード】
武蔵型板碑　緑泥片岩製板碑　山北中学校遺跡　河村氏

【要旨】
中世の関東では緑泥片岩で造られた武蔵型板碑が広く流通した。中世の神奈川県域でも同様であるが、その分布は県の東部に多く、西に行くにしたがって減少する傾向にあり、箱根町、南足柄市、小田原市などの県西部ではほとんど存在しない。ところが、昭和二六年（一九五一）に県の西端に位置する山北町で、多数の武蔵型板碑が出土しており、武蔵型板碑の流通を考える上で重要な事例であるが、これまでその存在はほとんど知られていなかった。本稿は神奈川県内の板碑分布の概要を述べ、山北中学校遺跡の板碑の紹介を行うものである。

はじめに

板碑とは板状の石材で作られた卒塔婆で、五輪塔や宝篋印塔などと共に中世の代表的な信仰関係の石造物として全国各地で造られた。関東地方では埼玉県の秩父地方や比企郡小川町などで産出する緑泥片岩で造られた武蔵型板碑という形式のものが多く、関東一円に流通した。[1]

緑泥片岩は板状に剥離する性質があるため板碑型への加工が比較的容易で、また、緑色の色彩は美しく、この点でも信仰具に適していた。平成二六年、埼玉県小川町にある武蔵型板碑の石材採掘や板碑型への加工を行っていた下里・青山板碑製作遺跡が国指定史跡に指定されたことは記憶に新しい。

武蔵型板碑の形は板状の石材の頭部を山形に作り、その下部に二段の切り込みを入れ、塔身の中央に供養の対象となる仏像や種子、その下方に願文、造立趣旨、年紀などの銘を刻む。板碑の大きさは五メートルを超える大型のものから二〇センチメートル程の小型のものもあるが、五〇センチメートルから七〇センチメートル程度のものが多い。[2]

旧武蔵国域で確認された武蔵型板碑は五万基に及ぶとされるが、[3]周辺の地域を加えるとその数はさらに多く、中世に造立された板碑の総数はどの位になるか見当もつかない。このような生産量の多さとともに造形的にも優れているところから、武蔵型板碑はわが国の板碑の代表的な存在となっている。

神奈川県域の板碑では、数量としては武蔵型板碑が一番多く見られるが、その分布は一様ではない。大まかにいえば県東部は多いが、西部は少なく、特に相模川以西では極めて少ない。しかし、本県西端に位置する山北町で、昭和二六年（一九五一）に複数の武蔵型板碑が出土してい

たのである。文献史料の少ない中世の山北地方や同地を支配した河村氏に関する資料として、また、武蔵型板碑の流通を考える上でも重要な資料であるが、これまでその存在は広く知られることがなかった。

当館では、本年二月、特別展「石展―かながわの歴史を彩った石の文化―」を開催し[4]、山北中学校遺跡出土の板碑の展示を行ったが、会場の制約もあり武蔵型板碑は二基の展示にとどまった。本稿では資料の重要性に鑑みて、現在、確認できる山北中学校遺跡から出土した板碑を破片を含め紹介をおこないたい。なお、本文末尾にそれらの目録を掲げた。

一　神奈川県域の板碑の分布と武蔵型板碑

最初に神奈川県域に分布する板碑と石材について簡単に述べておく。本県で製作された板碑は「相模型板碑」などと称されることがあるが、武蔵型板碑のように定型的な形があるわけではなく、箱根山周辺で産出する安山岩を用いて製作された板碑を総称するもので、用語としては甚だ曖昧と言わざるを得ない。また、安山岩の中でも、小田原市根府川周辺で産出する根府川石製のものは、石質に特徴を持つため区別することが多い。県外の石材としては、黒雲母片岩製の常総型板碑、緑泥片岩製の武蔵型板碑がある。

次にこれらの石材ごとの使用状況を簡単に述べてみる。

(1)　根府川石

小田原市根府川周辺で産出する安山岩で板状節理を持つ。鎌倉時代末から南北朝時代に板碑の石材として利用された。現在でも石碑などに用いられていることが多い。根府川石製の板碑は、現在、六基確認されており[5]、いずれも小田原市域に伝来、あるいは出土するため、きわめて地域的に展開した板碑といえる。製作時期は居神神社の文保元年（一三一七）銘が最も古く、小田原城御用米曲輪遺跡から出土した康永元年（一三四二）銘が最も新しい。

(2)　安山岩

箱根山などで産出する安山岩を板碑の石材として利用したもので、もともと板状の石材ではないため板状に整形して利用したものや、自然石に近いものまで様々な形のものがある。

整形が施された板碑の中でも大型のものは、徳治三年（一三〇八）銘の鎌倉市長谷寺の宝篋印塔陽刻板碑で、全高はおよそ二・七メートルある。全体を丁寧に板状に整形し、塔身には宝篋印塔がレリーフされている。長方形の塔形とともに陽刻で表現する方法は当時盛行していた武蔵型とは異なるものである。

南足柄市沼田の西念寺には、武蔵型板碑の特徴をもつ鎌倉時代末期から南北朝時代とみられる阿弥陀三尊種子板碑がある。頭部は山形で、二段の切り込みを入れ、その下に額部を表現した印刻線を持つ。確認できる高さは七三・五センチメートル、基部の幅は三〇センチメートル程である。

前述した二基ほどの大きさはなく小型のものであるが、鎌倉市長谷寺には五輪塔を陽刻したものが二基ある。また、山北中学校遺跡からも形状が似る大日如来の種子を陰刻した板碑が出土している（図7）。

あまり加工を施さず、自然石に近い石材を利用した板碑で比較的大型のものとしては、小田原城内に鎌倉から南北朝時代とみられる大日一尊種子板碑が建つ（石材の産地は箱根山周辺とされる）。また、小型のものとして居神神社、玉伝寺などには安山岩の扁平な河原石に五輪塔を線刻、

または陽刻したものがある。[6]

安山岩は五輪塔や宝篋印塔などの石材としての利用は多く、その製品は関東一円に展開したが、板碑に造られることは少なかった。板状に加工する工程が必要となるため、避けられたのであろう。

(3) 黒雲母片岩（常総型板碑）

筑波山麓の黒雲母片岩で作られた板碑で、横幅のある四角形のものが多いが、神奈川県域には武蔵型を模した形のものもある。鎌倉市五所神社にある弘長二年（一二六二）の年紀をもつ倶利伽羅不動板碑。また、同市の光明寺にある年紀銘は判読しがたいが五所神社のものと同時期とされる阿弥陀種子板碑などで、本県内での流通量は少ない。

(4) 緑泥片岩（武蔵型板碑）

石材の産地は前述したとおりである。神奈川県内で確認される板碑の中では数量的に最も多いが、その分布は多摩川の流域である川崎市域や横浜市域に多く、西部に行くに従って減少する。[7] このことから武蔵型板碑の流通には多摩川の舟運が重要な役割を果していたことがうかがわれる。鎌倉市域にも多いがこれらは海運によっていたとみられ、鎌倉幕府が所在していたため武家の館や寺院が多く、それにともない板碑の造立数も多かったのであろう。

このように県内分布の板碑は、地元の石材である箱根周辺の安山岩を使用したものもあるが、数量的には少なくその分布も限られている。数量が多いのは緑泥片岩製の板碑だが、西に行くに従ってその数が減るのは、その重量が流通の障壁となったからであろう。

二　山北中学校遺跡の武蔵型板碑

昭和二六年、神奈川県山北町の山北中学校の校舎建築にともなう山裾の削平工事の際、中世の墓地が発見された。発見当時の状況を伝える記録類は存在しないが、複数の板碑とともに、鎌倉時代から室町時代の五輪塔や宝篋印塔、また瀬戸・渥美・常滑・猿投窯の蔵骨器がともに出土した。板碑の内、一基は大日如来の種子が陰刻された安山岩製であるが、それ以外は緑泥片岩製の武蔵型板碑で、いずれも折損や欠損があるが、塔身に彫られた種子からみると確認できるものは阿弥陀三尊種子板碑である。

板碑とともに出土した五輪塔や宝篋印塔は近隣の種徳寺（山北町山北）に移設されており、五輪塔の水輪部を数えてみると五四基分あるため、[8] かなりの規模の墓地であったことがうかがえる。

山北中学校遺跡について、昭和三二年（一九五七）に山北地方の文化財調査をおこなった赤星直忠氏は、正応四年（一二九一）銘の二基、乾元二年（一三〇二）銘の一基を銘文の概略とともに簡単に紹介された。[9] 日野一郎氏は、『足柄乃文化』第七号で板碑とともに遺跡の概要を紹介されたが、赤星氏の調査同様に、発見当時の記録がなく、出土資料も散逸し、しかも発見からかなり時間が経過した時期での執筆ということもあり、遺物の紹介が中心となっているのはやむを得ない。また、板碑研究の蓄積があまり多くなかった時代のためか、遺物の紹介は蔵骨器が中心で、板碑については、乾元二年銘と正応四年銘の武蔵型板碑、そして安山岩製の鎌倉時代末期とされる板碑の紹介にとどまり、その他の板碑については言及されていない。[10] 渡辺美彦氏は、『板碑の総合研究2 地域編』で神奈川県を担当され、その中で山北中学校遺跡の武蔵型板碑二基、安山岩製

板碑一基について報告されている。[11] また、平成十二年に刊行された『山北町史』史料編では「山北中学校遺跡」の項で板碑の紹介を行っている。[12] しかし、遺跡の概要説明が中心で、板碑は破片を除き主要な作例の図版は掲載されたが、トリミングされているものもあり、また、銘文や法量などの基本的な情報が割愛されているのは残念である。

管見の限りでは、山北中学校遺跡出土の板碑について述べている刊行物は以上の通りである。

板碑の中で年紀銘が確認できるものは多くはないが、最古のものは目録番号1の正応四年銘である。身部には天蓋の下に蓮台に乗る主尊の阿弥陀如来の種子を、その両脇には観音菩薩と勢至菩薩の種子が彫られる。種子の彫りも堂々としており、鎌倉時代の板碑の特徴が良く出ている。また年紀銘に加えて観無量寿経の偈文の一部が確認できる。上部と下部に折損が見られるのは惜しまれる。

他に造立年が確認できるものとしては、目録番号3、4の乾元二年銘である。これらもいずれも塔身の上部と下部が欠失し、主尊部も現状では確認できないが、3については脇侍として観音菩薩と勢至菩薩の種子が見えるため阿弥陀三尊種子板碑であることがわかる。4について脇侍の右側にあたる部分に観音菩薩の種子があるため、主尊に阿弥陀菩薩の種子を戴く阿弥陀三尊種子板碑と推測できる。これらの板碑は同年の二月と三月の同じ日にちに造られているため、同じ趣旨で造立されたとみられる。

また、年紀は確認できないものの、比較的完形に近い姿を残すものは目録番号2の阿弥陀三尊種子板碑である。塔身の中央部で斜めに折損しているが、中央に蓮台に乗る阿弥陀如来の種子、その下に脇侍としてやはり蓮台に乗る観音菩薩と勢至菩薩の種子を刻む。造立銘、趣旨銘などは彫りが浅いため判読できない。

目録番号7は緑泥片岩製ではなく、安山岩系の石材を使用した大日一尊種子板碑である。身部には大日如来の種子が陰刻される。本品は素朴な表現ながら武蔵型を模した山形の頭部と二条線を持ち、この板碑の造立に関わった人々が武蔵型を板碑の典型と見たからであろう。箱根山周辺の安山岩を使用した板碑は県内で数点見られるが、本品はそれらとは異なる石質であるため、[13] 今後、石材の産地が確定できると相模国西部の板碑流通を考える上で重要な作例となろう。

このように山北中学校遺跡出土の板碑には十三世紀末から十四世紀初頭の年紀銘があり、年紀が確認できないその他の板碑もほぼ同時期のものとみられる。武蔵型板碑の生産期間からみると、比較的前期のものである。[14] また、流通の面からみても、ある程度の数量が出土した遺跡としては西限に位置するといえる。

中世の山北は河村郷といい、波多野荘（現神奈川県秦野市域）を本領とした波多野遠義の子、秀高が地名を姓としてこの地を支配していたが、文献史料から河村氏の活動を伝えるものはほとんどない。日野一郎氏も指摘されたが、[15] 鎌倉時代の山北でこのような大規模な墓地を営むことができるのは河村氏以外存在しないとみられ、これら板碑は河村氏の信仰や経済、また、中世の山北を考える上で文献史料の欠を補う貴重な資料群といえる。

註

（1）現在、最古の武蔵型板碑は嘉禄三年（一二二七）の年紀を持つ阿弥陀三尊を刻んだ図像板碑（須賀広板碑・埼玉県熊谷市江南）とされる。神奈川県内では寛元二年（一二四四）の年紀銘を持つ阿弥陀如来種子板碑（横浜市青葉区鴨志田町）で

ある。武蔵型板碑の造立は十四世紀の後期に最盛期を迎え、その後、若干の増減はあるものの次第に減少し、十七世紀初頭には造立は行われなくなる。

(2) 特別展図録『板碑』の解説、埼玉県立博物館、昭和五十七年。

(3) 埼玉県教育局生涯学習文化財課の下里・青山板碑製作遺跡の指定に関する発表資料、平成二六年。

(4) 特別展「石展―かながわの歴史を彩った石の文化―」主催 神奈川県立歴史博物館、神奈川県立生命の星・地球博物館。会期 平成二八年二月六日～三月二七日。

(5) 根府川石製の板碑については、『小田原市史』通史編、原始・古代・中世「第二節 相模型の板碑」の中で斉藤彦司氏が紹介しているが、その後、二基新たに発見された(⑤⑥)。①文保元年(一三一七)大日一尊種子板碑、居神神社。②元亨二年(一三二二)阿弥陀一尊種子板碑、居神神社。③建武元年(一三三四)、阿弥陀三尊種子板碑、東京国立博物館所蔵(小田原駅西方の青橋付近出土)。④建武五年(一三三八)阿弥陀三尊種子板碑、宝金剛寺。⑤康永元年(一三四二)大日一尊種子板碑、御用米曲輪遺跡出土。⑥年未詳、種子不明板碑、御用米曲輪遺跡出土。以上が根府川石製である。また、『小田原市史』で根府川石とされた「小田原城址公園板碑」は、安山岩ではあるが根府川石ではない。

(6) 前掲(5)と同じ。四〇九頁「五輪塔刻の自然石板碑」参照。

(7) 当該地域の自治体史に記載のある泥片岩製板碑の数量を以下記す。ただし、銘文を中心とした史料編に掲載されている場合、完形に近いものか、破片であるか不明。厚木市域では六四件(破片を含む)、平塚市域で一四基、伊勢原市で破片のみ、二宮町で一基、小田原市域で二基である。相模川以西では内陸部の厚木市域を除き、組織的な流通が行われなかったとみられる状況である。根府川石製や安山岩製の板碑が比較的多い小田原市域では、緑泥片岩製板碑は板橋の両覚院に貞和四年(一三四八)銘の破片、室町時代とされる阿弥陀三尊種子板碑が、『小田原市史』編纂時の調査で確認されたが、伝世品ではなく移入品の可能性があるとのことである。

(8) 『山北町史、史料編、原始・古代・中世』、二〇〇〇年、「山北中学校遺跡」の項には、日野一郎「中世墳墓の一形態―相模山北における鎌倉時代の墳墓群―」の記述を採用し「五輪塔は少なくとも二一基」とするが、種徳寺にある水輪の数と合わない。二一基は完形の石塔の数であろうか。また、山北中学校遺跡出土の石塔とともに種徳寺周辺に所在した五輪塔の残欠などを安置したため数量が増加したのであろうか。

(9) 赤星直忠「山北埋蔵文化財と民俗資料」『神奈川県文化財調査報告書』第二四集、一九五八年。赤星氏は「正応四年銘」を二基、「乾元二年銘」を一基とされているが、年紀と員数が入れ替わっている。

(10) 日野一郎「中世墳墓の一形態―相模山北における鎌倉時代の墳墓群―」『古代』第二四・二五合併号、早稲田大学考古学会、一九五七年。『足柄之文化』第七号、昭和三八年に再掲、『足柄之文化』第三十五号に再々掲載。

(11) 坂詰秀一編『板碑の総合研究2 地域編』柏書房、一九八三年

(12) 前掲(8)と同じ。

(13) 神奈川県立生命の星・地球博物館山下浩之氏のご教示による。

(14) 前掲(2)と同じ。武蔵型板碑の造立は十四世紀の後期に最盛期を迎え、その後、若干の増減はあるものの次第に減少し十七世紀初頭には造立は行われなくなる。

(15) 前掲(10)と同じ。

	名称	年紀	縦×横（cm）	備考
1	阿弥陀三尊種子板碑	正応四年（一二九一）	七六・五　×　三一・〇	塔身の山形上部欠失、塔身下部欠失、中央で斜めに折損。塔身の中央で斜めに折損、塔身の下部右側欠失。＊三尊の下部に造立趣旨などの三行の銘文がかすかに見えるが判読はできない。
2	阿弥陀三尊種子板碑	未詳	一二九・〇　×　三二・二	塔身の上・下部欠失、主尊は脇侍から判断した。＊塔身の上部が欠失し主尊は不明であるが、脇侍から名称を判断した。
3	阿弥陀三尊種子板碑	乾元二年（一三〇二）	六六・〇　×　三三・二	塔身の上部・下部欠失。
4	主尊不詳板碑	乾元二年（一三〇二）	八四・五　×　三二・〇	塔身上部・下部欠失、右に観音の種子があるため、阿弥陀三尊種子板碑とみられる。＊主尊部と左側の脇侍は欠失する。左側の脇侍の蓮台は残り、右側に観音の種子（サク）があることから、主尊は阿弥陀の三尊種子板碑であろう。
5	主尊不詳板碑（阿弥陀三尊種子板碑カ）	未詳	六七・五　×　三〇・〇	塔身下部の大部分を欠失。破片として伝来している8は、本碑の一部である。
6	主尊不詳板碑（阿弥陀三尊種子板碑カ）	未詳	四八・七　×　三三・五	安山岩製。
7	大日一尊種子板碑	確認できない	四五・八　×　一七・八	石質などから6の破片とみられる。
8	板碑破片		二六・〇　×　一九・七	
9	板碑破片		二七・〇　×　一七・〇	
10	板碑破片		一七・〇　×　二二・五	
11	板碑破片（三点）			同一の板碑の破片であるか確定はできない。

図２　阿弥陀三尊種子板碑
鎌倉時代

（サク）
（キリーク）
（サ）

図１　阿弥陀三尊種子板碑正応四年（一二九一）

光明
（サク）十方
（キリーク）正応二
（サ）念仏
摂取

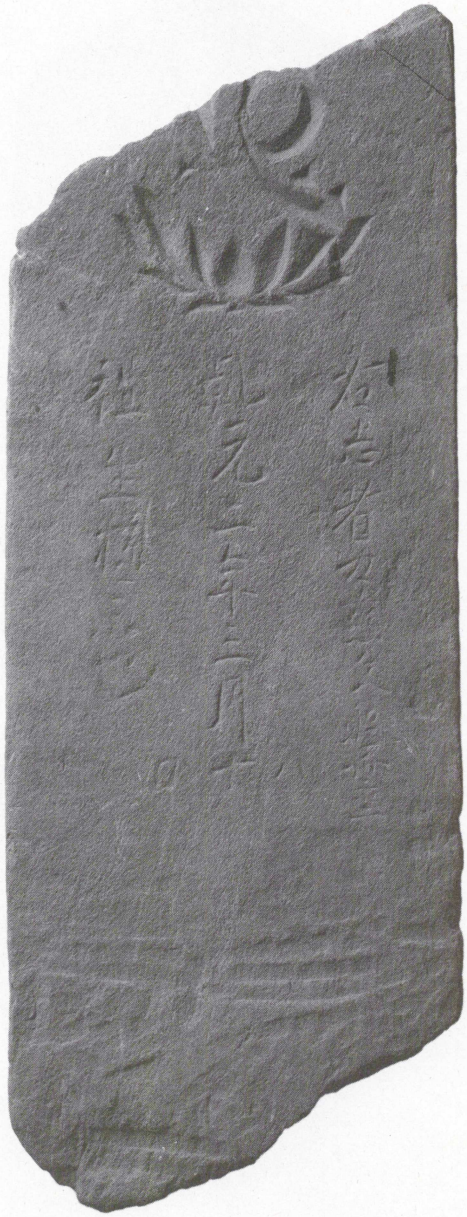

図４　主尊不詳板碑（部分）乾元二年（一三〇二）

右志者為慈父聖霊
乾元二年三月十八日
往生極楽也

図３　阿弥陀三尊種子板碑（部分）　乾元二年（一三〇二）

（サク）志為□□十
（キリーク）乾元二年二月八日
（サ）（無量カ）□□往生極楽也

図７　大日一尊種子板碑　鎌倉時代

図５　主尊不詳板碑（部分）　鎌倉時代

（サク）
□□五年八月
□

※石質から図６と図８は同一の板碑とみられる。

図６　主尊不詳（阿弥陀三尊種子カ）板碑（部分）鎌倉時代

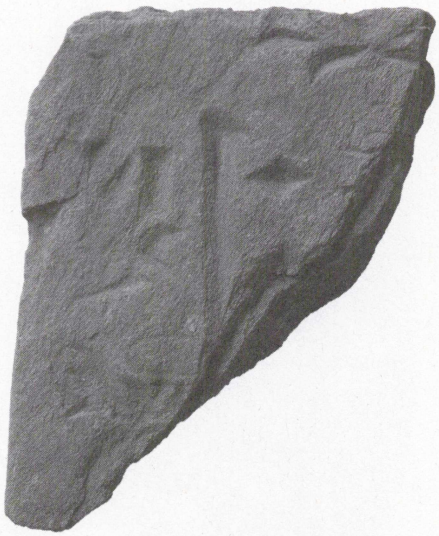

図 10　板碑破片

図 8　板碑破片（6 の破片）

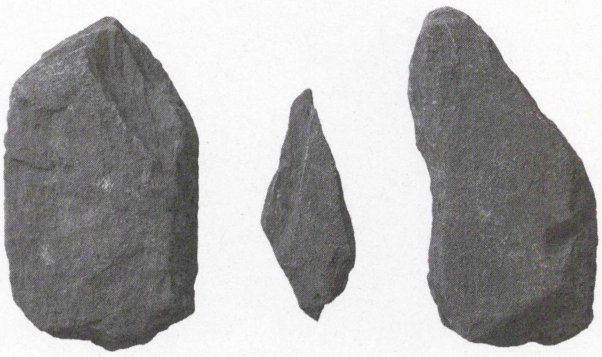

図 11　板碑破片（三点）

図 9　板碑破片